原爆の歴史を語るメタヒストリー学習の授業構成と実践事例案

愛知県立豊明高等学校　加島 悠太郎（かしま・ゆうたろう）

－使用教材－
『明解 歴史総合』
『明解 歴史総合図説 シンフォニア』

1 「歴史総合」で目指したこと

歴史は、ドラマや映画、小説、漫画、博物館の展示などあらゆる媒体を通じて語られるが、私たちが日常的に触れるこの「歴史」は、その語り手たちのバイアスが反映されたものとなっている。つまり、歴史は「解釈」されたものであり、決して唯一無二の「正しい歴史」などというものはないのである。そして、地理歴史科「歴史総合」では、自分で問いを立て、資料読解を通して、（他者と協働しながら）多面的・多角的に考察し、自分なりの歴史像を表現することが求められている。

そこで筆者は、「歴史総合」において、メタヒストリー学習を意識し、生徒が自分なりの歴史像を表現する授業を考案した。本稿では、何を意識して「歴史総合」の授業を構成したのかと、実践事例案を紹介する。

2 授業づくりの方向性

服部（2016）によれば、「社会の中の歴史に関するメタヒストリー学習」は、「社会における既存の歴史の内容を理解し、それを踏まえて社会においての歴史構築を分析し、理由や背景を認識したり、さらに社会にとっての作用、存続や改変の正当性を吟味検討し、既存の歴史への対応を判断したりする学習」である。そして、このメタヒストリー学習は３つの階層からなる。**第１層**は、過去の事柄について扱っている事物を取り上げ、過去の事柄との関連やその表し方の特徴を確認し、既存の歴史の内容を理解する学習である。例えば、織田信長に関してどのような歴史が語り継がれているか（歴史認識）を理解する学習段階である。

第２層は、過去の事柄について扱っている事物を取り上げ、その内容の理解を踏まえて、社会における歴史構築を分析し、既存の歴史の理由や背景を認識する学習である。これは、第１層で学習した歴史語り（歴史認識）が浸透した理由や背景を理解する段階である。例えば、なぜ織田信長は英雄として語り継がれたのか、といった学習が想定される。

そして**第３層**は、過去の事柄について扱っている事物の課題を取り上げ、歴史の理由や背景を踏まえて、社会にとっての作用、存続や改変の正当性を吟味し、既存の歴史への対応を判断する学習である。例えば、織田信長の英雄史観を批判的に検討し、今までの歴史の語りに問題があれば、別の語り方を模索するといった段階であり、換言すれば、新しい歴史像を構築する学びである。

これら３つの学習を意識することで、既存の歴史を批判的に検討し、自分なりの歴史像を構築できるだろう。このようなメタヒストリー学習により、生徒がみずからの歴史像を構築するには、**生徒が歴史的に考えるスキル**（以下、**歴史スキル**）が必要である。そこで、筆者なりに**歴史スキル**を整理してみた（ 表１ ）。

表１ メタヒストリー学習に必要な７つの歴史スキル（筆者作成）

A 問いを立てる力（何を調べるべきかを考える）
B 資料を読み取る力（何が書（描）かれているか理解する）
C 時代背景を理解する力（他の資料を参考に、着目した資料を深く読解する）
D 資料を批判する力（例：歴史の語り手の立場・内容の正確さを検討する力）
E 多面的・多角的に考察する力（複数の側面を異なる立場から分析する）
F 歴史解釈の力（歴史解釈を構築する）
G 歴史像を構築する力（自分が考える歴史像を表現する）

まず問いを立て、必要な資料を得る。そしてその資料を批判的に読解しつつ、さらに資料を歴史的文脈の中で（時代背景に即して）理解する。そして、読み取った情

報を多面的・多角的に考察し、最終的に自分の歴史像を構築するという流れである（このように**歴史スキル**を体系化すると、生徒の思考が画一化されるという懸念はあるが、１年生で実施する科目であることを鑑みて、「型を学ぶ」という側面を重視した）。

歴史スキルは、１学期の授業において概念の習得と活用練習を行った。例えば、ナポレオンについて、**歴史スキルＥ**を意識して、「ナポレオンはどのような人にとって英雄で、どのような人にとって侵略者か」を評価した。そして２学期前半には、スキルを活用しながら歴史を考察する練習を重ね、今回紹介する単元「原爆の歴史をどのように語り継ぐべきか」を実施した。

3 単元に関して

戦後 80 年が迫るなか、日本は世界唯一の被爆国として、核兵器の恐ろしさやその廃絶に向けたメッセージを発信し続けている。しかし、日本人が抱く原爆の認識と、世界各国が持つ原爆の認識は必ずしも同じではない。NHK 放送文化研究所が 1995 年に行った世論調査によれば、例えば、アメリカでは「原爆は早期の戦争終結を可能にし、結果的に多くの生命を守った」として、正しい選択だという意見が多数を占める。また、韓国では、日本の侵略行為を批判する観点から、日本が被害のみを主張することに反発している。

確かに、原爆による被害を次世代に語り継ぐことは重要であるが、それだけでは、原爆を正当化する考え方の存在や日本の戦争加害を意識しないものになってしまい、本当の意味での平和にはつながらないだろう。

では、この現状を踏まえると、今後の日本は、原爆の歴史をどのように後世に語り継ぐべきだろうか。この問題を考える際、原爆のとらえ方が多様だという点がキーになる。すなわち、原爆により大きな被害を受けた日本、原爆により危害を与えたアメリカ、そして日本による戦争加害に苦しんだことを背景に日本への原爆投下に肯定的な韓国の３つの立場を比較するのである。具体的には、日本の被害とアメリカの加害を比較することで、被害だけでなく、加害やその正当化の問題について考えることができる。さらに、日本の戦争加害とそれに苦しんだ韓国の立場を比較することで、日本が発信する平和へのメッセージにどのような批判があるのか、そして日本の戦争加害との向き合い方を考えることができる。

そこで、以上を念頭に、原爆を正当化する考え方や戦争加害にも留意した、「新しい原爆の歴史の語り方」を自分なりに構築し、表現する単元を構想した。

次に、単元の全体像を説明する。本単元は、「歴史総合」の大項目Ｃ「国際秩序の変化や大衆化と私たち」の中項目（３）「経済危機と第二次世界大戦」、（４）「国際秩序の変化や大衆化と現代的な諸課題」に該当する。

服部(2016)の理論を参考に単元計画を立てる（表２）。まず、本単元では、戦争被害と戦争加害の両面を意識して、原爆の歴史をどのように語り継ぐべきかについて探究する。そのためには、まず**第１層**として、世界の原爆認識（歴史の語られ方）を知る必要がある。そこで、単元の導入授業では、❶原爆による被害の確認（『明解 歴史総合』p.135 の「女学生が被爆翌日に疎開先の弟たちに宛てたはがき」や『明解 歴史総合図説 シンフォニア』p.150 を活用）、❷日本や世界各国の原爆のとらえ方が多様だと知る、そして❸**歴史スキルＡ**を意識して、問いを立てる活動の３つを行った。生徒は❸において、例えば、「なぜアメリカや韓国をはじめ多くの国が、原爆投下を正しいととらえているのか」といった問いを立てていた。ここでは、日本、アメリカ、韓国での原爆認識（歴史の語られ方）と、その形成理由・背景を分析する。まず、広島・長崎において被爆者による被害の語りに着目し、戦争の悲惨さや被害を改めて理解する。次にアメリカや韓国が原爆投下を正しいと考える理由・背景を学習する。このとき、アメリカの原爆による戦争加害と日本の戦争被害を、韓国を扱う際には、日本の戦争加害と韓国の戦争被害を意識させたい。そして**第２層**の最後に、

表２ 本単元におけるメタヒストリー学習の階層（筆者作成）

第１層「既存の歴史の理解」
❶原爆の歴史はどのように語り継がれているのか　（単元全体の問い）
⬇
第２層「既存の歴史の背景認識」
❷第一次世界大戦後の世界はどう変わったのか
❸なぜ再び世界大戦が起きたのか
❹冷戦とはどのような戦いだったのか
❺日本にとって原爆とは何か
❻現代アメリカでも原爆投下が「正しい選択」と考えられるのはなぜか（本時）
❼韓国にとって原爆とは何か
❽なぜ原爆のとらえ方は多様なのか（３つの立場を比較する）
⬇
第３層「既存の歴史への対応を判断」
❾原爆の歴史をどのように語り継ぐべきか　（冬休みの課題→グループ発表）

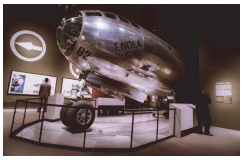
「歴史総合」　C.大衆化と私たち（2.第二次世界大戦・冷戦と原爆（6．アメリカと原爆））

単元のテーマ：原爆の歴史をどのように語り継ぐべきか

授業のテーマ：⑥現代アメリカでも原爆投下が「正しい選択」と考えられるのはなぜか？（語られ方の理由）

1995年アメリカのスミソニアン博物館で、これまで語られることのなかった原爆による日本の被害（負の側面）にも焦点を当てた「原爆展」が企画された。しかしこの企画に対しては、「原爆投下は正しかった」などの批判が相次ぎ、結局、原爆による被害ではなく、原爆を投下した飛行機（エノラ・ゲイ）を展示するものに変更された。

←米大統領
トルーマン



❶資料Ａ・Ｂから情報を読み取る

資料Ａ スミソニアン博物館の「原爆展」になされた批判の一部

・日本は真珠湾を奇襲（不意打ちのこと）攻撃したが、これがなければアメリカが戦争をすることはなかった

・日本は侵略者であるはずなのに、日本の被害に焦点を当てるのはおかしい

・原爆を否定的に描き、米軍人を侮辱している

このようなスミソニアンへの批判の背景には、アメリカで支持されてきた「原爆神話」（原爆投下を正当化するもの）の存在がある。そして、この「原爆神話」の普及に大きな影響を与えたのが、「スティムソン論文」である。

資料Ｂ スティムソン論文（要約）（中沢志保「原爆投下決定における『公式解釈』の形成とヘンリー・スティムソン」より引用し一部改編した）

私はこの論文で、原爆投下決定のプロセスを正確に説明したつもりである。私のような責任を負うものであれば、他の手段が取れなかったことを理解するであろう。戦争末期、日本の陸軍はまだ500万人の兵力を温存していた。対日戦ですでに米兵30万人が戦死していた。あくまでも日本が降伏を拒否し、上陸作戦が展開されれば、米兵の新たな犠牲者は100万人と推定された。

したがって、上陸作戦を導入する前に、日本を降伏に導くあらゆる手段を使う必要があった。上陸作戦以外の方法で具体化されたのが、天皇の活用と原爆投下だった。われわれは、日本の早期降伏を達成するために、天皇が、戦争をやめ彼を通じて連合国に服従するように日本国民に命令することを望んだ。そして、このことを可能にするためには、天皇及び側近がわれわれの要求に従う強制的な理由が必要であった。原爆投下は、この目的を達成するための唯一の手段と判断された。

問題：アメリカで原爆投下が「正しかった」とされる理由は何か？（資料Ａ・Ｂから分かるものをすべて書きなさい）

アメリカ人の結論（多数意見）	理由
原爆投下は正しい （「原爆神話」と呼ばれる）	

❷時代背景を踏まえて資料Ａ・Ｂを深く理解する

アメリカ軍は、占領中の日本において、アメリカ人を含めた外国人記者の自由な広島・長崎への取材を禁止し、人的被害を示すものは、アメリカ国民に一切公開しないようにしていた。

しかし、1945年末ごろより、アメリカ国内において原爆投下への批判が高まる兆しがあった。そこでアメリカ政府は、原爆投下に至った理由を示すため「スティムソン論文」（「原爆の投下決定」）を公表した。これは、戦争の早期終結によって上陸作戦による予想犠牲者100万人の命を救おうとしたこと、そのために日本に降伏を促す必要があり、日本降伏には最終手段として原爆投下が必要だと判断されたことが述べられている。

この「スティムソン論文」は、多くの人から賞賛を受け、さらに原爆投下を正当化したいトルーマン大統領をはじめ、多くの政府高官により引用された。そして、この原爆理解（原爆認識）は1950年代から1970年代まで、アメリカの歴史の教科書においても紹介されていた。その結果、この論文の内容が多くのアメリカ人に浸透し、原爆は正しいという意見が広がった。

そのため、原爆の負の側面にも焦点を当てようとしたスミソニアン博物館の「原爆展」企画は、空軍協会をはじめ多くの人に批判された。特に空軍協会は、国内に強い影響力を持っており、メディアを通して、原爆の正当性を訴えた。こうした背景があり、アメリカでは原爆投下を「正しい選択」と考える人が多く存在するのだ。

問題：なぜアメリカで「原爆神話」が広がったのか？

❸資料批判→資料の内容が正確か検討する

Ⅰ　「スティムソン論文」の執筆者の一人であるスティムソンが、アメリカの元陸軍長官（元米軍関係者）であることを踏まえると、「スティムソン論文」を読む際に気をつけるべきことは何か？

→（　　）に都合のよい内容かもしれない

Ⅱ　スティムソンが主張する「原爆投下の理由」は本当か？

実はトルーマン大統領は、日本上陸作戦が行われた場合の推定犠牲者数が、スティムソン論文で示された「100万人」よりはるかに少ないこと、具体的には2万人以内だという報告を1945年6月には受けていた。つまり、「100万人」という数字は実際の想定よりも大げさだったとわかる。

そして早期終戦のためという理由も説得力を失っている。というのもアメリカ政府は、日本への通信傍受により、1945年7月には日本政府が、天皇制の維持を条件に、和平（終戦）を受け入れる準備をしていると知っていた。そしてそのうえで、ポツダム宣言から天皇制の保障を示す文言を意図的に削除した。さらに、トルーマン大統領らは、政府高官から早期終戦を受諾させるために、天皇制を保障する文言を復活させるよう頼まれた際も、これを拒否した。つまり、原爆使用を回避して戦争を早期に終結させる道を取らなかったのである。また、アメリカは当初、ポツダム会談でソ連の対日参戦を確実にすることを目的としていたが、会談前日に原爆実験が成功したため、ソ連参戦の必要性を見直し、最終的にソ連をポツダム宣言作成の話し合いから閉め出すことに決めたのだ。つまり、原爆以外に方法がないという点も否定されている。

❶スティムソンが主張する「原爆投下の理由」は正確な情報に基づくものか？→○　or　×

❷スティムソンの主張を（　肯定　・　否定　）する証拠として挙げられている部分に下線を引きなさい

今日のテーマ「なぜアメリカでは原爆投下が「正しい選択」と考えられているのか？」について、アメリカ人がそのように考える理由やその考えが定着した背景を説明せよ。また、日本が受けた原爆の被害を考えると、アメリカが原爆を「正しい選択」と考えることは、正しいと思うか、あるいは間違っていると思うか、考えを述べなさい。

資料　授業で使ったワークシート（筆者作成）

３つの立場を比較する学習を行い、**第３層「原爆の歴史をどのように語り継ぐべきか」**の考察につなげたい。

4　授業事例紹介

では、本単元における授業事例として、表２ の**❻「現代アメリカでも原爆投下が「正しい選択」と考えられるのはなぜか**（以下、ＭＱ）」を紹介する（ 表３ ）。本時の目標は、現代アメリカにおいて、原爆投下の選択が「正しい」とされる理由や、その認識がアメリカ国民に共有された歴史的背景を理解することである。

最初に 資料 **授業で使ったワークシート**で、1995年に、スミソニアン博物館で企画された「原爆展」について紹介する。ここでは、当初の計画では「原爆展」において、原爆によって日本が受けた被害（原爆の負の側面）に焦点を当てるはずだったが、これに大きな批判があったので、企画内容が変更された経緯を説明し、ＭＱを提示する（このＭＱは、単元の序盤で生徒が立てた問いをベースとしている（**歴史スキルＡ**））。

展開部では、まず**歴史スキルＢ**を意識して「**資料Ａ**とＢから情報を読み取る」活動を行う。**資料Ａ**はスミソニアン博物館の「原爆展」企画に寄せられた批判の紹介で、**資料Ｂ**は原爆神話の形成に大きく影響したスティムソン論文の要約である。ここでは、戦争の早期終結（早期終結説）、そして予測される米兵の犠牲をなくすために、しかたなく原爆投下を決定した（人命救済説）という、アメリカの原爆認識、つまり、なぜアメリカが原爆投下を正しいと考えるのかが分かる。

次に、**歴史スキルＣ**を意識して「時代背景を踏まえて**資料Ａ・Ｂ**を深く理解する」活動を行う。ここでは、**資料Ｂ**や学校教育の影響により、原爆神話がアメリカで共有されたこと（原爆神話が広がった背景）が分かる。

最後に、**歴史スキルＤ**を意識して、「資料批判」の活動を行う。ここでは、スティムソン論文の執筆者の一人であるスティムソンが、元陸軍長官（元米軍関係者）という立場にあることから、論文の内容が米軍やアメリカ

表3 授業の展開と歴史スキルの関係性（筆者作成）「※」が歴史スキルに関する学習活動。

導入
・スミソニアン博物館の「原爆展」企画に批判が殺到したことを紹介。
・MQ「現代アメリカでも原爆投下が「正しい選択」と考えられるのはなぜか」
展開
※B資料から情報を読み取る
・なぜ「原爆展」の展示内容が変わったのか。→原爆は正しいと反発があった。
・原爆投下を「正しい」という理由は何か。
※C時代背景を踏まえて、資料を深く理解する
・なぜアメリカで「原爆神話」が広がったのか。
※D資料批判（資料の語り手の立場・内容の正確さを分析）
・スティムソン論文の執筆者の一人であるスティムソンが、アメリカの元陸軍長官（元米軍関係者）であることを踏まえると、スティムソン論文を読む際に気をつけるべきことは何か。
・スティムソンが主張する「原爆投下の理由」は本当か。
❶スティムソンが主張する「原爆投下の理由」は正確な情報に基づくものか。
❷スティムソンの主張を（肯定・否定）する証拠として挙げられている部分に下線を引きなさい。
整理
・「なぜアメリカは原爆投下を「正しい選択」と考えるのか」。この問いに対する答えを、ポートフォリオに記入しなさい。また、すでに否定されている内容が、いまだに信じられている理由は何か。
・（次回以降の授業に向けた予告的な問いかけ）前回学習した原爆の被害と被爆者の経験を踏まえると、アメリカが原爆投下を正しいと考えていることは、正しいと考えますか、あるいは間違っていると考えますか。

政府に都合のよいものかもしれないという疑いをかける。そして、別の資料を読むことで、先の早期終結説や人命救済説は、現在のアカデミックな世界ではすでに否定されていると分かる構成になっている。

以上の読解を通じて、MQに解答する。そしてさらに、日本の被害を踏まえると、原爆を投下したアメリカが、それを「正しい」と考えていることは、正しいことか、あるいは間違っていることかと問いかけておく。そうすることで、「❽なぜ原爆のとらえ方が多様なのか」や単元末の探究学習に効果的につながるだろう。このように、歴史の語られ方に着目し、歴史像を表現する経験を積むことで、生徒一人一人が世の中を動かす「大衆」であるという気付きにつなげていきたい。

5 結びにかえて

本稿では、単元「原爆の歴史をどのように語り継ぐべきか」と、具体的な授業事例案「現代アメリカでも原爆投下が「正しい選択」と考えられるのはなぜか」を紹介した。

単元を通じて、原爆に対する世界の認識とその背景について扱うことは、世界から日本の位置づけを分析することにつながり、「歴史総合」という科目のコンセプトにも合致すると考えている。ただ、執筆時には、単元の途中段階であったため、授業事例案における生徒の記述を紹介できないことは非常に残念である。

今年度（令和6年度）の「歴史総合」では、年間を通じて**歴史スキル**の育成と、それを活用した探究学習への取り組みを行ってきた。今回紹介した単元・授業事例において、生徒は初めてメタヒストリー学習を行う。1学期から**歴史スキル**の習得を目指して学習活動を行ってきたが、生徒は徐々に資料を活用することに慣れてきたように感じている。また、**歴史スキル**の中で**A「問いを立てる」**に関しては、一定の難易度があるが、各単元も導入の授業において必ず問いを立てて、学習の見通しを持たせることを意識した。その際、生徒には資料から「矛盾」を見つけて、それに対して問いを立てることを繰り返している。その結果、2学期後半（紹介した単元）には、スムーズに問いを立てることができた。

また、2学期までに**歴史スキル**の習得と、それを活用した探究学習を行ってきたが、3学期には、着目すべき資料を1つ提示し、それを基にテーマや問い、時代背景などを生徒がみずから調べ、探究していく学習を行いたいと考えている。こうした**歴史スキル**の習得と活用を繰り返し、歴史を通じて探究する学習を繰り返すことで、探究科目への移行もスムーズに行われると考えている。

〈参考文献〉

・服部一秀（2016）「社会のなかの歴史に関するメタヒストリー学習の意義－ドイツの歴史教科書『歴史と出来事－テューリンゲン州版』を手がかりにして」社会系教科教育学会『社会系教科教育学研究』第28号

・NHK放送研究部／河野謙輔・森口宏・友宗由美子・原由美子・齋藤建作・服部弘・井谷豊（1996）「世界のテレビは戦後50年周年をどう伝えたか」NHK放送文化研究所『NHK放送文化研究所年報』第41集

・中沢志保（2007）「原爆投下決定における「公式解釈」の形成とヘンリー・スティムソン」『文化女子大学紀要（人文・社会科学研究）』第15巻

・松田はな子（2014）「原爆神話とその影響」『英米文化論叢』Kansai University Journal of Cross-Cultural Studies

・小室憲義（1998）「「原爆投下理由」の再検証－スミソニアン原爆展論争から－」『異文化コミュニケーション研究』第1号

・手塚千鶴子（2002）「日米の原爆認識－「沈黙」の視点からの一考察－」『異文化コミュニケーション研究』第14号